

「ヤングケアラー実態調査」の結果について

潜在しているヤングケアラー（本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話等を日常的に行っている18歳未満の子どものこと。）の実態を正確に把握し、必要な支援につなげる対応策に取り組むことを目的として実施した「ヤングケアラー実態調査」の結果について、以下のとおり報告します。

1 調査の概要及び調査結果について

資料7-2「港区ヤングケアラー実態調査 調査結果の概要」のとおり

2 主な課題

(1) 子どもへの調査結果

家族などの世話をしている子どもが、区がヤングケアラーとして把握していた数より多く、長時間に及ぶ世話をしたり、健康状態や学校生活に支障をきたしたりしている可能性のある子どもが一定数含まれることが確認されました。このことから、表面化していない家庭の早期把握と支援につなげることが課題となっています。

(2) 高齢者・障害者・子育て家庭の支援に関わる事業所への調査結果

ヤングケアラーについて、「聞いたことはあり、事業所として意識して対応している」は25.6%ですが、「聞いたことはあるが、事業所としては特別な対応をしていない」が61.1%でした。

子どもの心配な様子に気づいたが、緊急性が低いと考え支援につなげていない、家庭内での子どもの状況が見えにくく、実際の状況がつかみづらいことも今回の調査から確認できました。そのため、ヤングケアラーを早期発見し、地域全体が支援する体制を強化する必要があります。

3 調査結果を踏まえた今後の取組について

(1) ヤングケアラー支援に係るガイドライン作成

医療、教育、子育て支援、障害、高齢等の関係機関代表、学識経験者等を構成委員とする港区ヤングケアラー支援体制検討委員会を設置します。

港区ヤングケアラー支援体制検討委員会では、支援体制の検討をはじめ、区民、関係機関等の誰もがヤングケアラーへの理解を深めるとともに、ヤン

グケアラーの可能性のある子どもの様子や、港区の支援体制がわかるガイドラインを作成し、区全体で子どもたちを見守り、支える体制を整えます。

(2) ヤングケアラー・コーディネーターの配置

子ども家庭支援センターに、ヤングケアラーを支援する専門的知見のあるコーディネーターを配置して、子ども食堂等の民間支援団体とも連携することで、潜在的なヤングケアラーの早期発見と多機関・多職種連携によるヤングケアラー支援の強化を図ります。

なお、ヤングケアラー・コーディネーターは要保護児童対策地域協議会関係機関、民間支援団体等に向けた研修も実施し、支援者の専門知識の向上と意識啓発を行います。

4 今後のスケジュール(予定)

令和5年3月下旬	区ホームページ等で周知
4月1日	ヤングケアラー・コーディネーター配置
5月中旬	第1回港区ヤングケアラー支援体制検討委員会開催

1 調査の概要

調査の目的・期間・対象・方法・回収率等

■調査目的

潜在している、ヤングケアラー（本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話を日常的に行っている18歳未満の子どものこと。）の実態を正確に把握し、必要な支援につなげる対応策に取り組むことを目的とする。

■調査主体

港区子ども家庭支援部子ども家庭支援センター
港区教育委員会事務局学校教育部教育指導担当

■調査期間

令和4年9月14日～10月14日

■調査対象・調査方法・回収率等

対象	調査方法	配布数	回収数	回収率
①区立小学校に在籍している小学1～3年生	学校で、学習用タブレット端末を利用して回答	5,430人	4,550人	83.8%
②区立小学校に在籍している小学4～6年生	学校で、学習用タブレット端末を利用して回答	4,893人	4,409人	90.1%
③中学生	区立中学校在籍者は、学校で学習用タブレット端末を利用して回答 区立中学校在籍者以外は、郵送で依頼し、紙媒体又はオンラインで回答	5,761人	2,711人	47.1%
④高校生世代	郵送で依頼し、紙媒体又はオンラインで回答	4,813人	887人	18.4%
⑤高齢者・障害者・子育て家庭の支援に関わる事業所（区立小・中学校を除く）	郵送又は電子メールで依頼し、紙媒体又はオンラインで回答	317事業所	180事業所	56.8%
⑥区立小・中学校	電子メールで依頼し、オンラインで回答	29校	29校	100.0%

■全国調査結果として掲載しているデータの出典

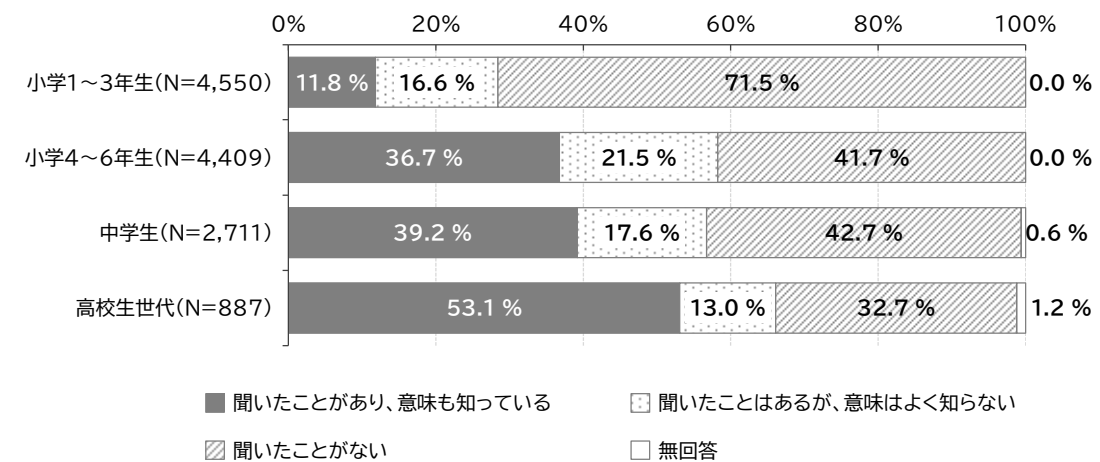
- 小学6年生及び小学校の全国調査結果
令和3年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業 ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書
(厚生労働省・文部科学省)
- 中学2年生及び全日制高校2年生並びに中学校の全国調査結果
令和2年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業 ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書
(厚生労働省・文部科学省)

2 子ども向け調査

(1) ヤングケアラーの認知度

「ヤングケアラー」という言葉をこれまでに聞いたことがあるか。（小1～3:問9、小4～6・中学生:問11、高校生世代:問12）

●「聞いたことはあるが、意味はよく知らない」又は「聞いたことがない」と回答した人は、小学1～3年生 88.1%、小学4～6年生 63.2%、中学生 60.3%、高校生世代 45.7%と、4割以上が「ヤングケアラー」という言葉の意味を知らない。

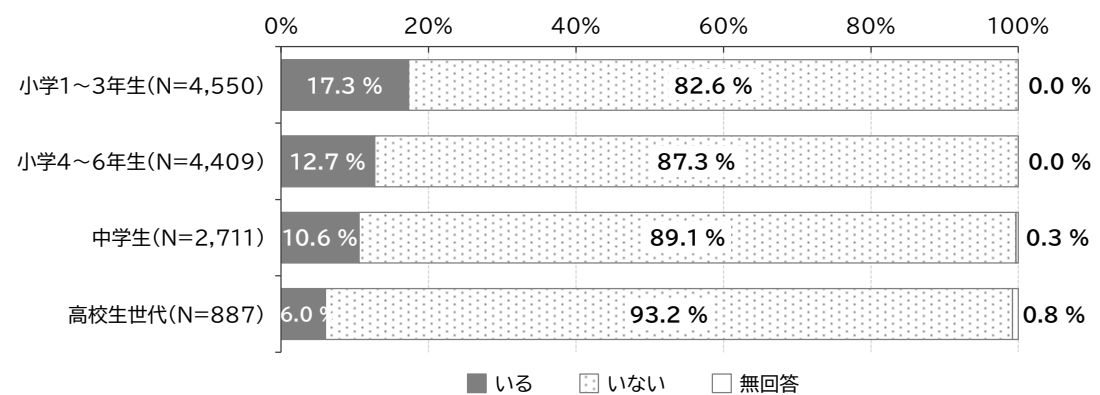


<参考>全国調査結果
「聞いたことはあるが、よく知らない」又は「聞いたことはない」
小学6年生:質問項目なし
中学2年生:93.0%
全日制高校2年生:93.7%

(2) 世話をしている家族の有無

家族の中に、あなたが世話をしている人はいるか。（小1～3:問10、小4～6・中学生:問12、高校生世代:問13）

●年代が高くなるにつれて、世話をしている割合が低くなる。
●小学1～3年生では 17.3%、小学4～6年生では 12.7%、中学生では 10.6%、高校生世代では 6.0%の回答者が、家族の世話をしていると回答している。
※「いる」と回答したが、誰の世話をしているかという問いに、「いない」や「ペット」などヤングケアラーに当てはまらない回答があった場合は、回答を「いない」に修正している。



<参考>全国調査結果
「いる」
小学6年生:6.5%
中学2年生:5.7%
全日制高校2年生:4.1%

2 子ども向け調査

(3) 世話を必要としている人

誰の世話をしているか (小1~3:問 11①、小4~6・中学生:問 13、高校生世代:問 14)

※家族の世話をしていると回答した人のみ

- いずれの年代でも「きょうだい」が5割以上で最も高い割合となっている(小学1~3年生 58.4%、小学4~6年生 61.3%、中学生 61.7%、高校生世代 52.8%)。
- 次いで「母」が多く、全世代で3割程度である。

	母	父	祖母	祖父	きょうだい	その他	無回答
小学1~3年生(N=789)	33.8	18.0	8.6	5.1	58.4	5.2	9.0
小学4~6年生(N=560)	27.7	15.7	6.6	4.6	61.3	3.9	10.2
中学生(N=287)	26.8	13.2	7.0	2.8	61.7	2.1	9.8
高校生世代(N=53)	34.0	13.2	15.1	3.8	52.8	1.9	9.4

(単位: %)

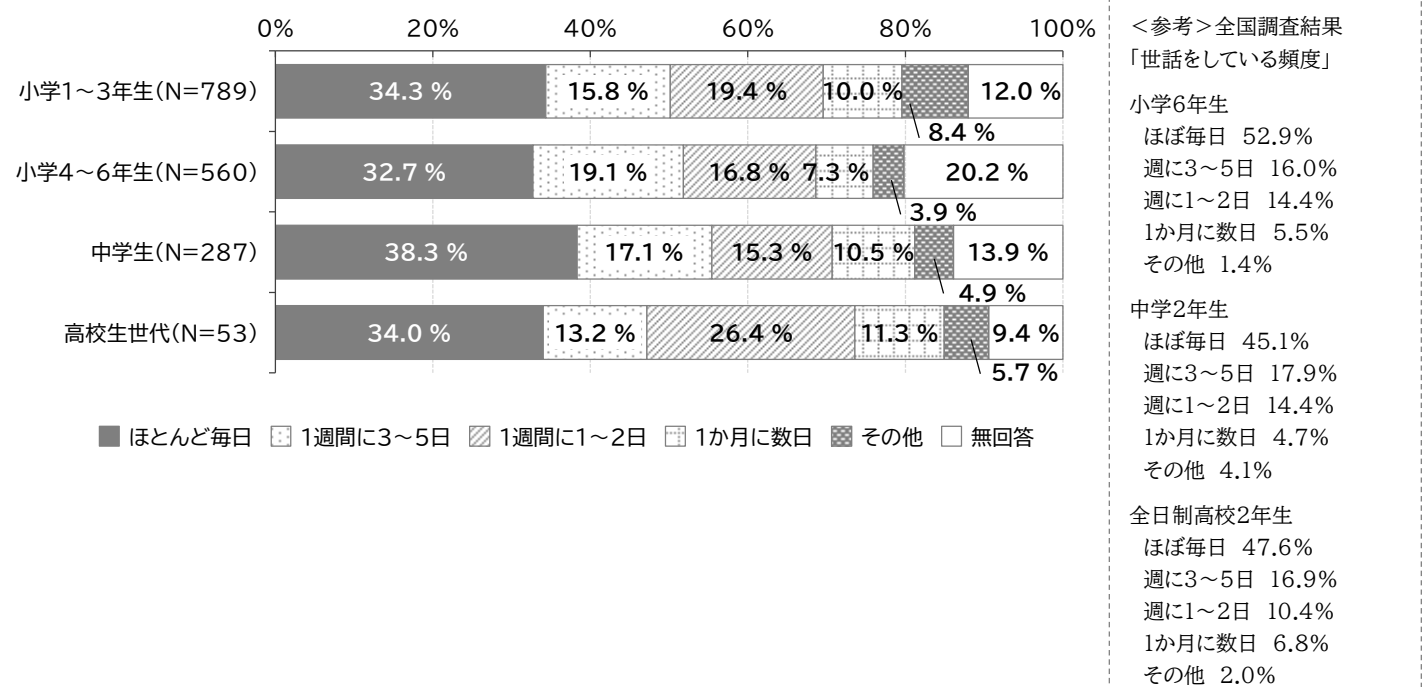
<参考>全国調査結果
「きょうだい」
小学6年生:71.0%
中学2年生:61.8%
全日制高校2年生:44.3%

(4) 世話の頻度

どのくらい世話をしているか(頻度) (小1~3:問 11③、小4~6・中学生:問 15(4)、高校生世代:問 16(4))

※家族の世話をしていると回答した人のみ

- いずれの年代でも、「ほとんど毎日」が最も高い割合である(小学1~3年生 34.3%、小学4~6年生 32.7%、中学生 38.3%、高校生世代 34.0%)。
- 小学生と比べて、中学生でやや頻度が高い傾向がみられる。



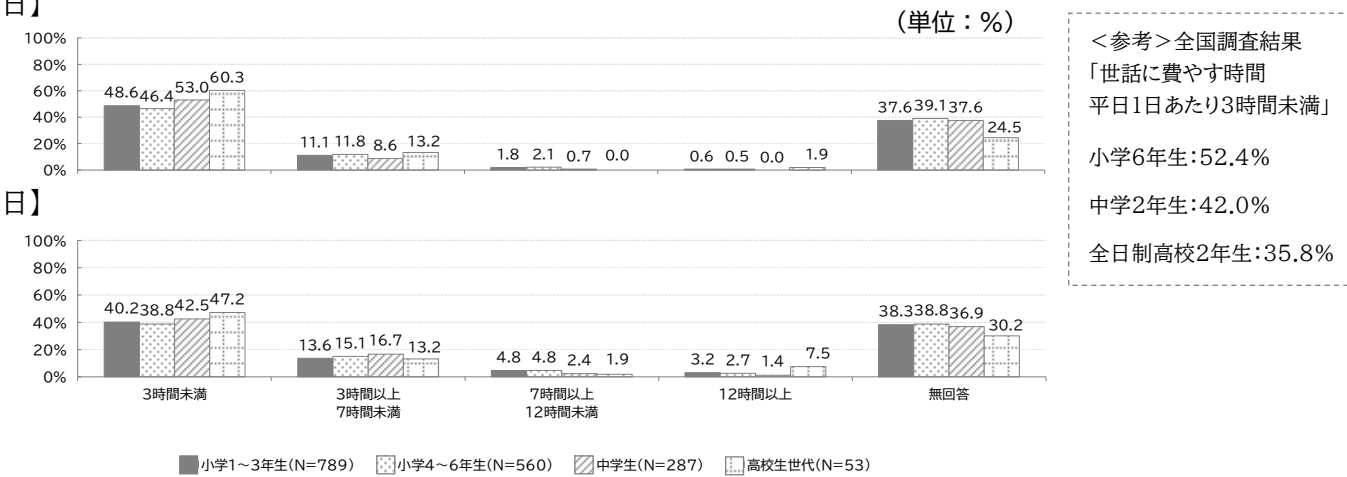
(5) 世話をしている時間

どのくらい世話をしているか(1日当たりの時間) (小1~3:問 11④・⑤、小4~6・中学生:問 15(5)、高校生世代:問 16(5))

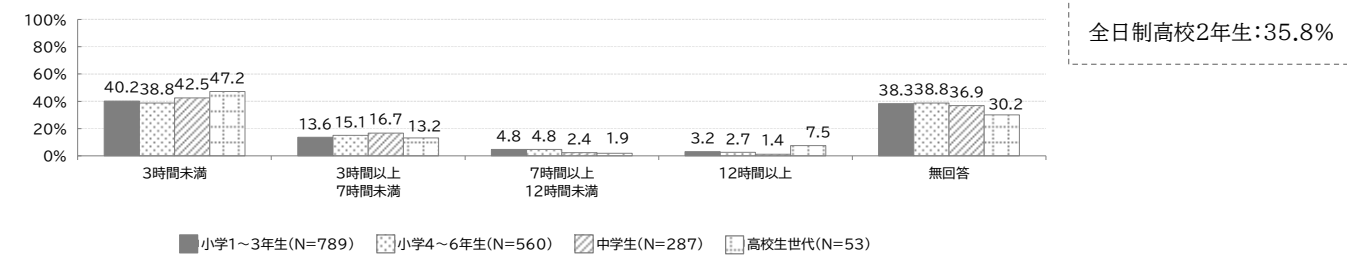
※家族の世話をしていると回答した人のみ

- 平日、休日とも、世話をしている時間は3時間未満が最も高い割合である。
- 年代による大きな差は見られない。
- 平日と比べて、休日の方が3時間以上の回答が多く、世話をしている時間が長い傾向がみられる。

【平日】



【休日】



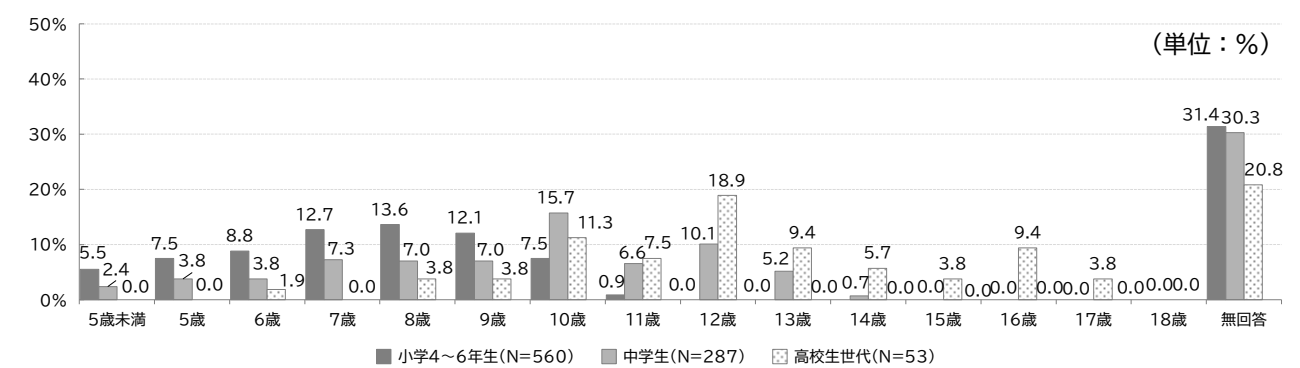
(6) 世話を始めた年齢

何歳から世話をしているか (小1~3なし、小4~6・中学生:問 15(3)、高校生世代:問 16(3))

※家族の世話をしていると回答した人のみ

- 小学生及び中学生の中には、就学前から世話をしている人がいる。
- 高校生世代は、小学校高学年あたりから世話をしている割合が高い。

※15歳以上は高校生世代のみ回答している。



<参考>全国調査結果「世話を始めた年齢 就学前」
【就学前から世話を始めた】
小学6年生:17.3%(~6歳) 中学2年生:8.8%(就学前) 全日制高校2年生:6.2%(就学前)

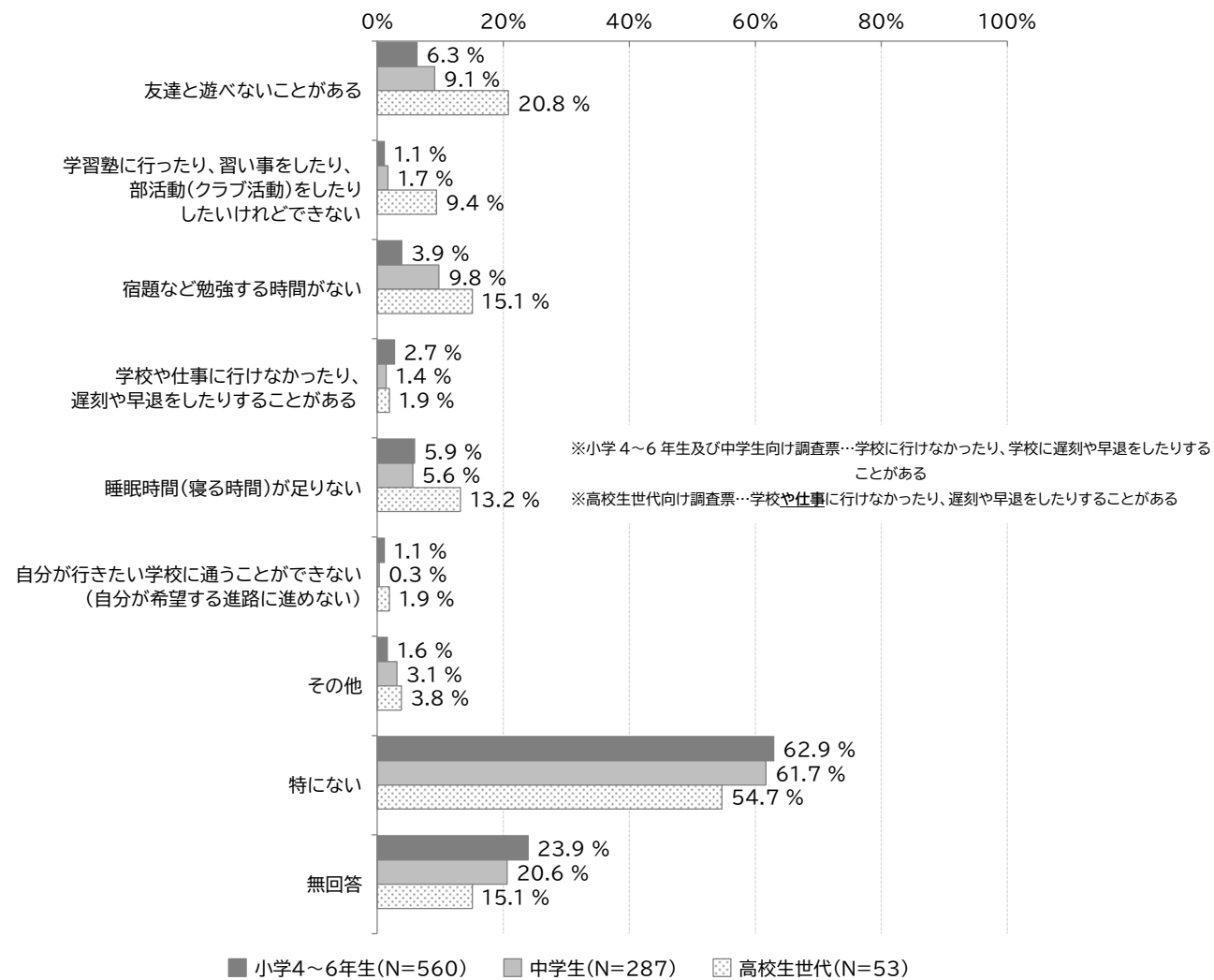
2 子ども向け調査

(7) 世話をしていることによる生活への支障

世話をしていることによる生活への支障 (小1~3:なし、小4~6・中学生:問 16、高校生世代:問 17)

※家族の世話をしていると回答した人のみ

- 全ての年代において、「特にない」が5割以上で最も高い割合となっている(小学4~6年生 62.9%、中学生 61.7%、高校生世代 54.7%)。
- 年代が上がるにつれて、生活への支障を感じる傾向にある。



<参考>全国調査結果 ※上位2位まで

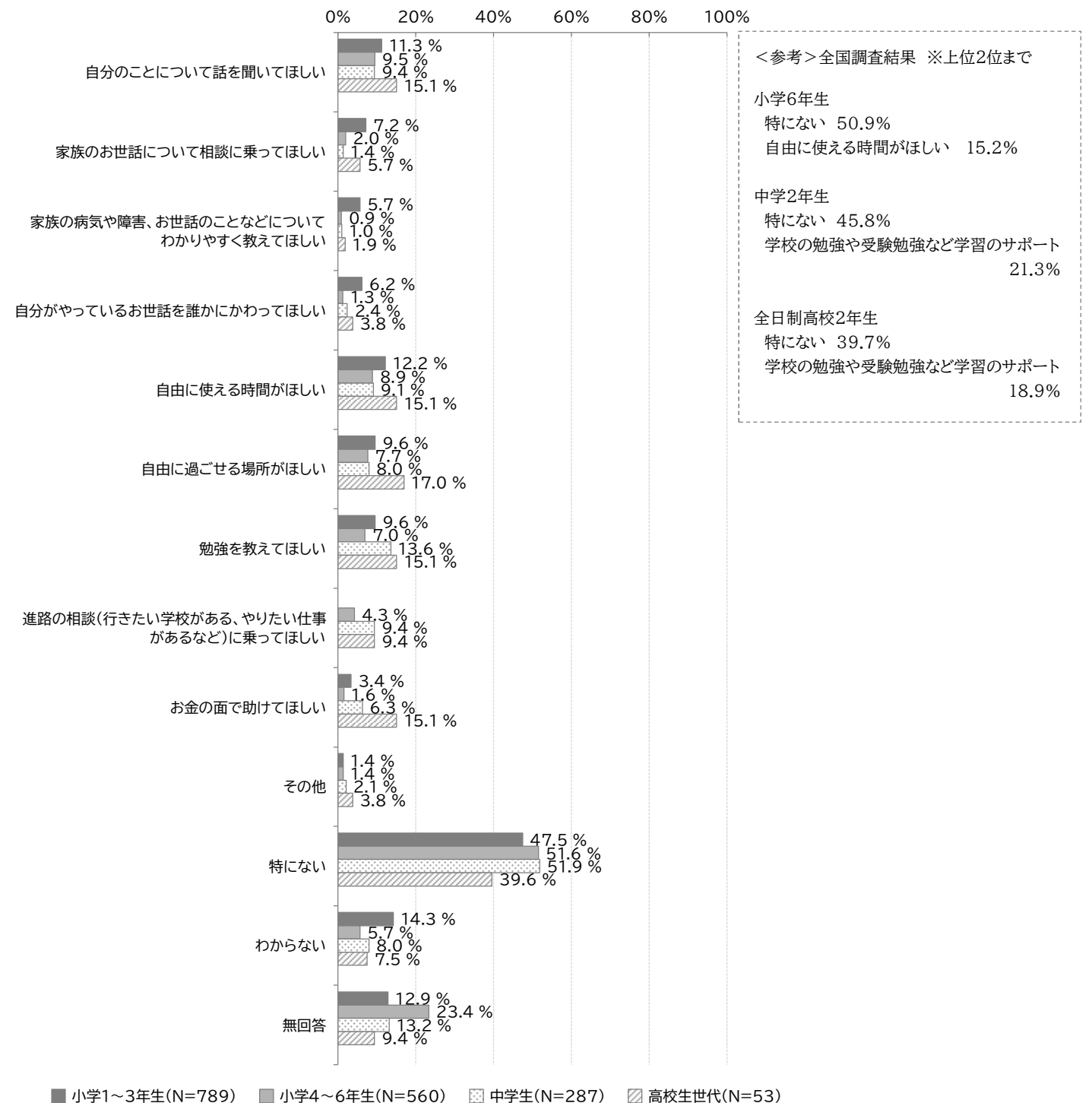
年代	特にない	自分の時間が取れない
小学6年生	63.9%	15.1%
中学2年生	58.0%	20.1%
全日制高校2年生	52.1%	16.6%

(8) 学校や周囲の大人に助けてほしいことや、必要としている手助け

学校や周囲の大人に助けてほしいことや、必要としている手助け (小1~3:問 13、小4~6・中学生:問 18、高校生世代:問 19)

※家族の世話をしていると回答した人のみ

- 「特にない」がいずれの年代でも最も高い割合で、4~5割程度となっている(小学1~3年生 47.5%、小学4~6年生 51.6%、中学生 51.9%、高校生世代 39.6%)。
- 次いで、小学1~3年生は「わからない」、小学4~6年生は「自分のことについて話を聞いてほしい」、中学生は「勉強を教えてほしい」、高校生世代は「自由に過ごせる場所がほしい」が高い。



<参考>全国調査結果 ※上位2位まで

小学6年生	特にない 50.9%	自由に使える時間がほしい 15.2%
中学2年生	特にない 45.8%	学校の勉強や受験勉強など学習のサポート 21.3%
全日制高校2年生	特にない 39.7%	学校の勉強や受験勉強など学習のサポート 18.9%

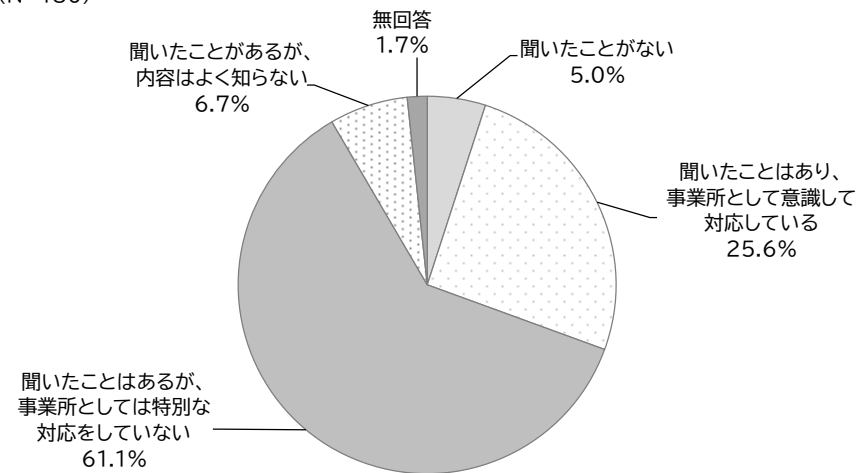
3 事業所向け調査

(1) ヤングケアラーの認知度

「ヤングケアラー」という言葉を聞いたことがあるか (問4)

- 「聞いたことはあるが、事業所としては特別な対応をしていない」が61.1%で最も高い割合である。
- 次いで「聞いたことはあり、事業所として意識して対応している」が25.6%となっている。
- 「聞いたことがあるが、内容はよく知らない」が6.7%、「聞いたことがない」が5.0%となっている。

(N=180)



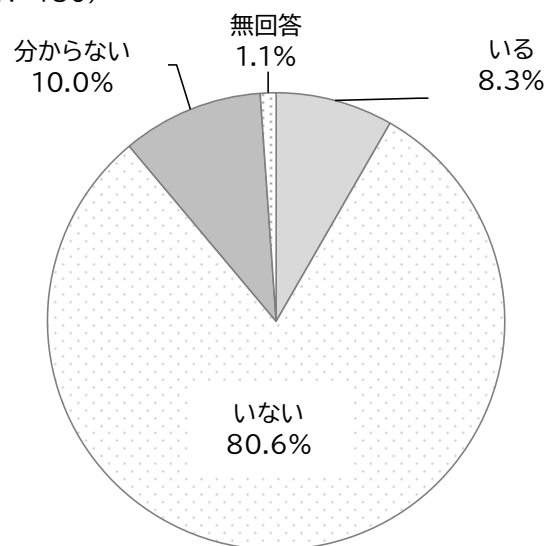
(2) ヤングケアラーと思われる子どもの有無

ヤングケアラーと思われる(可能性も含む)子どもがいるか (問5)

ヤングケアラーと思われる子どもの数(問6(1))

- 「いる」が8.3%(15事業所)、「いない」が80.6%(145事業所)となっている。
- 回答があった事業所の総計では29人が把握されており、男子より女子が多い傾向にある。

(N=180)



(単位:人)

	男	女	その他	総計
就学前	1	0	0	1
小学1年生	2	0	0	2
小学2年生	0	0	0	0
小学3年生	0	1	0	1
小学4年生	0	2	0	2
小学5年生	1	1	0	2
小学6年生	0	4	0	4
中学1年生 (小中一貫教育校は7年生)	1	2	0	3
中学2年生 (小中一貫教育校は8年生)	2	1	0	3
中学3年生 (小中一貫教育校は9年生)	1	1	0	2
高校1年生	0	0	0	0
高校2年生	0	1	0	1
高校3年生	1	2	0	3
小学生(学年不明)	0	0	0	0
中学生(学年不明)	0	1	0	1
高校生(学年不明)	2	1	0	3
小学校や中学校、高校の学年は 分からないが年齢は分かる	0	0	0	0
わからない	0	0	1	1
総計	11	17	1	29

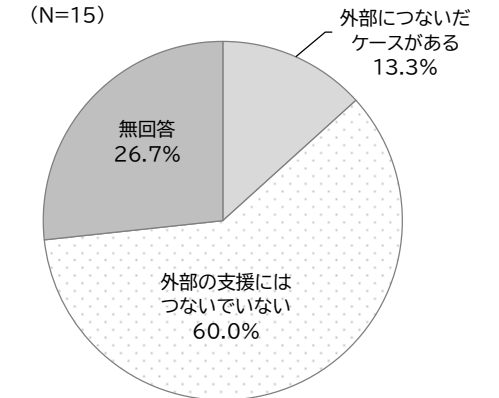
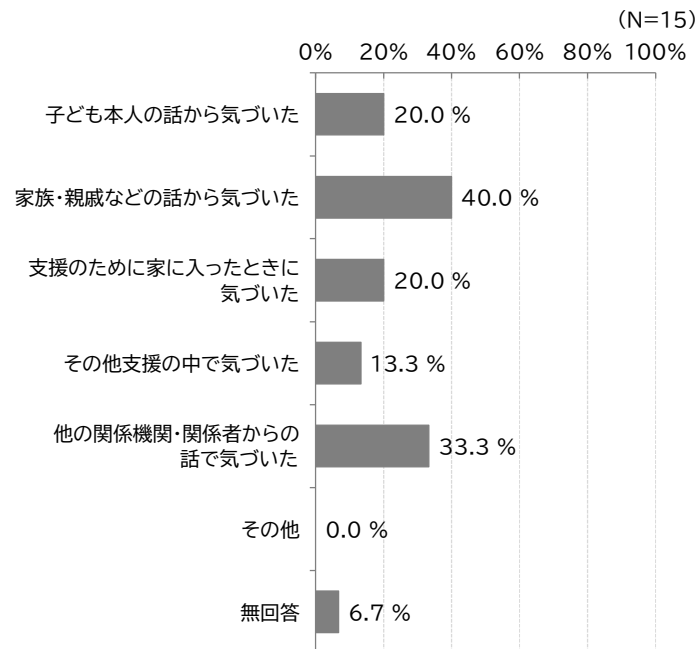
(3) ヤングケアラーに気づいたきっかけ

ヤングケアラーと思われる子どもに気づいたきっかけ (問7) ※ヤングケアラーと思われる子どもがいると回答した事業所のみ

- 「家族・親戚などの話から気づいた」が40.0%で最も高い割合であり、次いで、「他の関係機関・関係者からの話で気づいた」が33.3%となっている。

ヤングケアラーと思われる子どもについて、具体的に事業所以外の外部の支援につないだケースがあるか (問10) ※ヤングケアラーと思われる子どもがいると回答した事業所のみ

- 「外部の支援にはつないでいない」が60.0%、「外部につないだケースがある」が13.3%であり、半数以上が外部の支援につないでいない。



問12(2) 外部の支援につないでいない理由(一部抜粋)

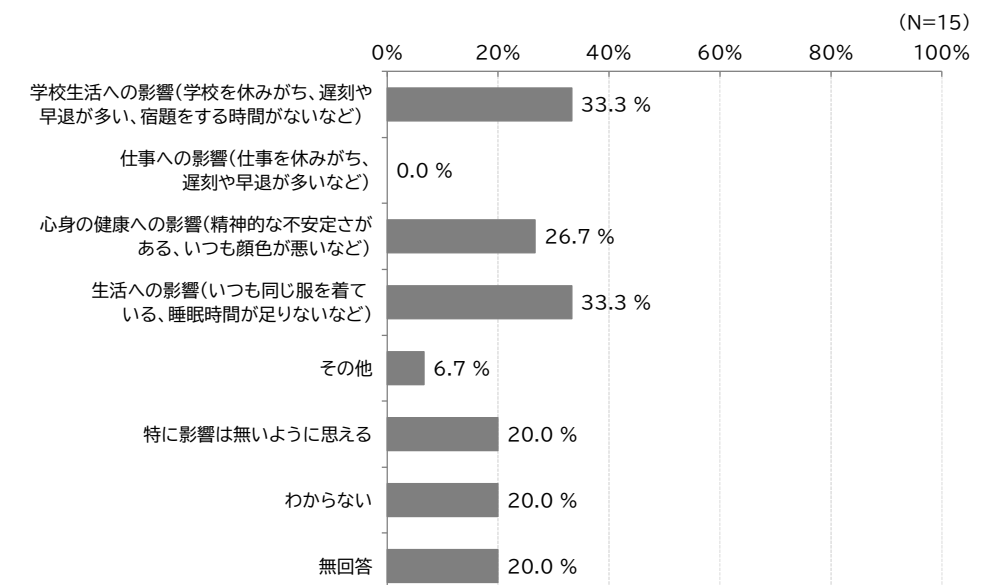
- ・緊急性が低いから。
- ・進学で実家から離れる予定があるため。
- ・既に地区担当保健師や、子ども家庭支援センター、児童相談所などの関係機関とつながっており、新たに情報を共有する必要がなかった。
- ・世帯が経済的に困窮している等の理由ではなく家庭の中の当然の役割として行っているように見受けられるため(問題のある状況になっていない)。

(4) 日常生活や学業等への影響

ヤングケアラーと思われる子どもは、日常生活や学業等にどのような影響が出ていると思われるか (問13(1))

※ヤングケアラーと思われる子どもがいると回答した事業所のみ

- 「学校生活への影響」と「生活への影響」が33.3%で最も高い割合である。
- 次いで「心身の健康への影響」が26.7%となっている。



3 事業所向け調査

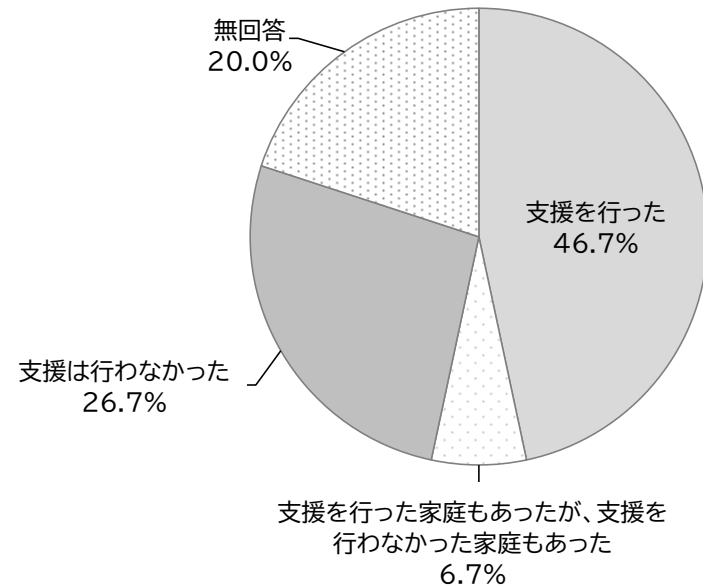
(5) 家庭に対する支援

ヤングケアラーと思われる子どもがいる家庭に対して支援を行ったか (問13(2))

※ヤングケアラーと思われる子どもがいると回答した事業所のみ

- 「支援を行った」が46.7%で最も高い割合である。
- 支援の内容は、「ケース検討会議を経て、ヘルパーに入ってもらった」、「甥の世話をしている生徒の母と祖母に、甥の学童クラブ入会を勧めて入会させた」などがある。

(N=15)

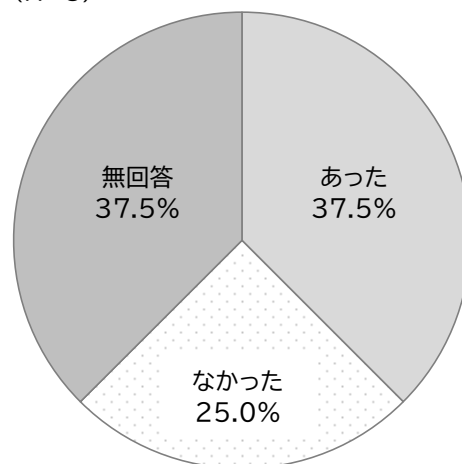


(6) 支援を行うにあたり困難であると感じた点

支援を行うにあたり、困難であると感じた点はあるか (問13(4)) ※「支援を行った」又は「支援を行った家庭もあったが、支援を行わなかった家庭もあった」と回答した事業所のみ回答
把握や支援にあたって難しいと感じること(問15) ※ヤングケアラーと思われる子どもがいると回答した事業所のみ

- 支援を行うにあたり困難であると感じた点は、「あった」が37.5%、「なかった」が25.0%である。
- ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいこととしては、家族内のことで問題が表面化しにくく、子どもの状況把握や家庭への介入が難しいといったことなどが挙げられる。

(N=8)



問15 ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいと感じること(一部抜粋)

- ・当該児童と施設側での感じ方のギャップがある。児童の後ろに保護者がいるので、一定より立ち入ることができない壁を感じる。
- ・家庭内の状況が見えにくいので実際の状況がつかみづらい。
- ・子どもに、ヤングケアラーという自覚がない。
- ・子ども自身が困っていることを他者に伝えることが難しいのではないか。
- ・障害がある家族を誰が支援しているのかわかりにくい。ヤングケアラーをしている子が不満を訴えたりできない。
- ・今回は母親自ら「この子はヤングケアラー状態で...」という発言があったことで把握できたが、把握すること自体困難だと感じる。支援については自施設が提供できるサービス内では限りがあるため、限界を感じる。
- ・児童が家事やきょうだい児の世話をすることに関して、文化や価値観の共有をすることが難しい。また、発達障害を疑う保護者は自身の困り感に気づきにくく、支援が受けられにくい。
- ・家庭によっては話したがらない時もある。

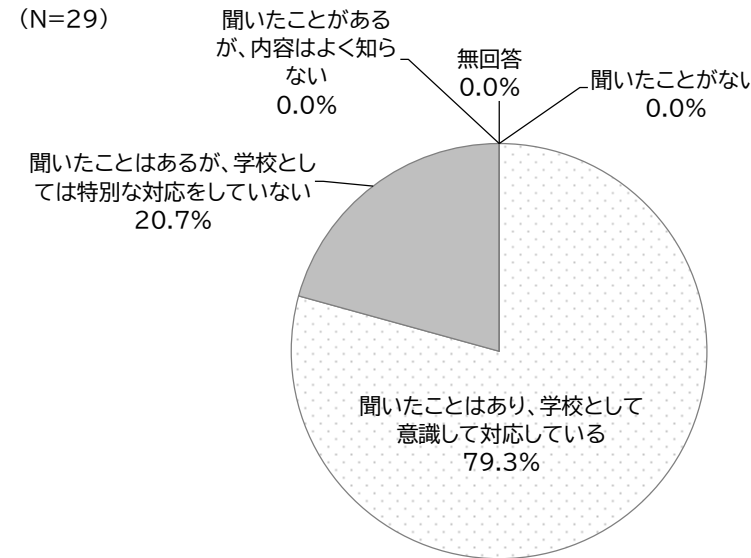
4 区立小・中学校向け調査

(1) 「ヤングケアラー」の認知度

「ヤングケアラー」という言葉を聞いたことがあるか (問7)

- 「聞いたことはあり、学校として意識して対応している」が79.3%で最も高い割合である。
- 次いで「聞いたことはあるが、学校としては特別な対応をしていない」が20.7%となっている。

(N=29)



<内訳>

学校種別	認知度	割合
小学校(N=19)	聞いたことはあり、学校として意識して対応している	89.5%
	聞いたことはあるが、学校としては特別な対応をしていない	10.5%
	聞いたことがあるが、内容はよく知らない	0%
	聞いたことがない	0%
中学校(N=10)	聞いたことはあり、学校として意識して対応している	60.0%
	聞いたことはあるが、学校としては特別な対応をしていない	40.0%
	聞いたことがあるが、内容はよく知らない	0%
	聞いたことがない	0%

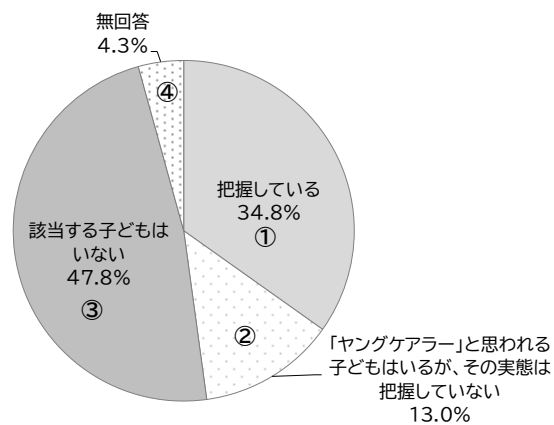
(2) ヤングケアラーの実態把握

「ヤングケアラー」と思われる児童・生徒の実態を把握しているか (問8)

※「ヤングケアラー」という言葉を聞いたことがあり、学校として意識して対応していると回答した学校のみ

- 「該当する子どもはいない」が47.8%で最も高い割合であり、次いで「把握している」が34.8%となっている。
- 「『ヤングケアラー』と思われる子どもはいるが、その実態は把握していない」が13.0%となっている。

(N=23)



<内訳>

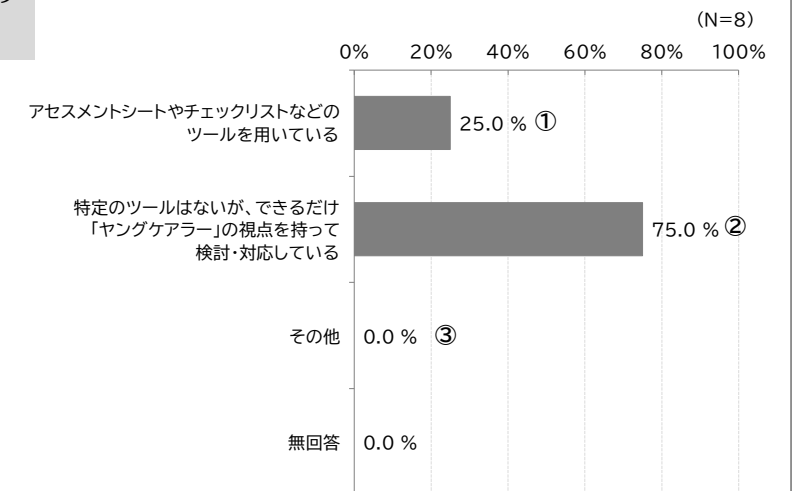
学校種別	把握状況	割合
小学校(N=17)	① 該当する子どもはいない	35.3%
	② 把握している	11.8%
	③ 「ヤングケアラー」と思われる子どもはいるが、その実態は把握していない	52.9%
	④ 無回答	0%
中学校(N=6)	① 該当する子どもはいない	33.3%
	② 把握している	16.7%
	③ 「ヤングケアラー」と思われる子どもはいるが、その実態は把握していない	33.3%
	④ 無回答	16.7%

「ヤングケアラー」と思われる児童・生徒をどのように把握しているか (問9)

※「ヤングケアラー」と思われる児童・生徒の実態を把握していると回答した学校のみ

- 「特定のツールはないが、できるだけ『ヤングケアラー』の視点を持って検討・対応している」が75.0%であり、半数以上を占めている。

(N=8)



<内訳>

学校種別	把握方法	割合
小学校(N=6)	① 特定のツールはないが、できるだけ「ヤングケアラー」の視点を持って検討・対応している	16.7%
	② アセスメントシートやチェックリストなどのツールを用いている	83.3%
	③ その他	0%
中学校(N=2)	① 特定のツールはないが、できるだけ「ヤングケアラー」の視点を持って検討・対応している	50.0%
	② アセスメントシートやチェックリストなどのツールを用いている	50.0%
	③ その他	0%

4 区立小・中学校向け調査

(3) ヤングケアラーと思われる児童・生徒の有無

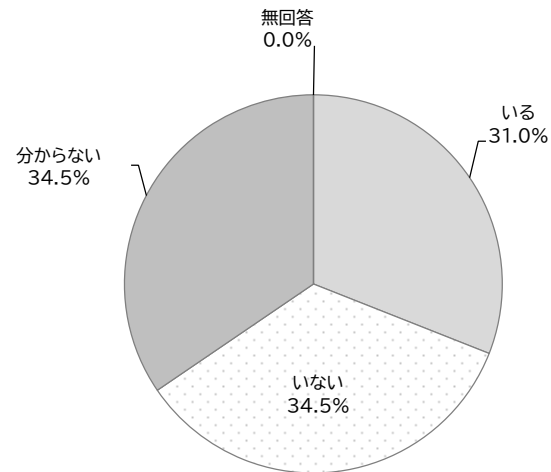
ヤングケアラーと思われる(可能性も含む)児童・生徒がいるか (問 10)

ヤングケアラーと思われる(可能性も含む)児童・生徒の数 (問 11)

※ヤングケアラーと思われる児童・生徒がいると回答した学校のみ

- 「いる」が31.0%(9校)、「いない」が34.5%(10校)、「分からない」が34.5%(10校)となっている。
- 区立小・中学校では、総計16人が把握されている。
- 小学3年生から中学3年生までおおむね同じぐらいの数である。

(N=29)



(単位：人)

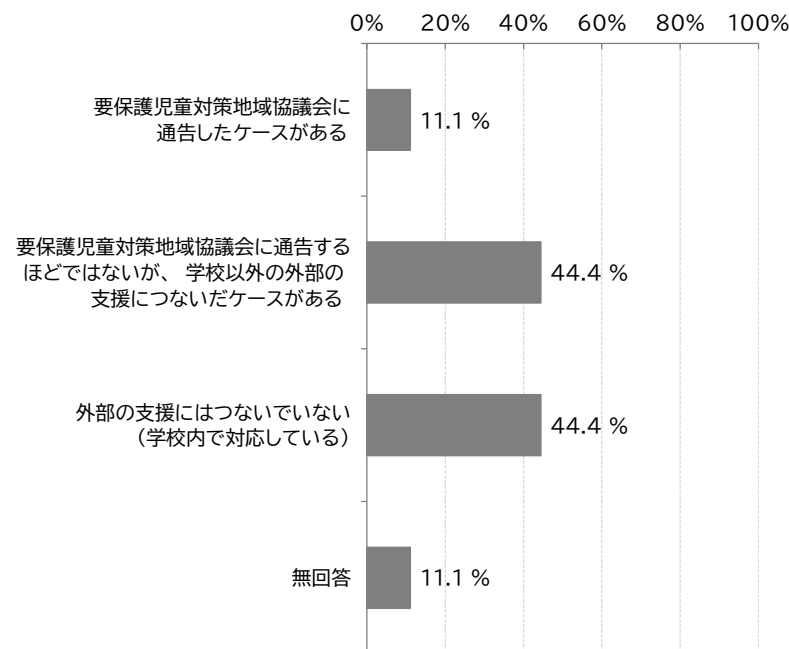
	男	女	その他	総計
小学1年生	0	0	0	0
小学2年生	0	0	0	0
小学3年生	0	3	0	3
小学4年生	1	2	0	3
小学5年生	2	1	0	3
小学6年生	0	1	0	1
中学1年生 (小中一貫教育校は7年生)	1	0	0	1
中学2年生 (小中一貫教育校は8年生)	2	2	0	4
中学3年生 (小中一貫教育校は9年生)	0	1	0	1
総計	6	10	0	16

ヤングケアラーと思われる児童・生徒について、具体的に学校以外の外部の支援につないだケースがあるか (問 12)

※ヤングケアラーと思われる児童・生徒がいると回答した学校のみ

- 「要保護児童対策地域協議会に通告するほどではないが、学校以外の外部の支援につないだケースがある」及び「外部の支援にはつないでいない(学校内で対応している)」が44.4%(各4校)で同じ割合である。

(N=9) 問 14(2) 外部の支援につないでいない理由



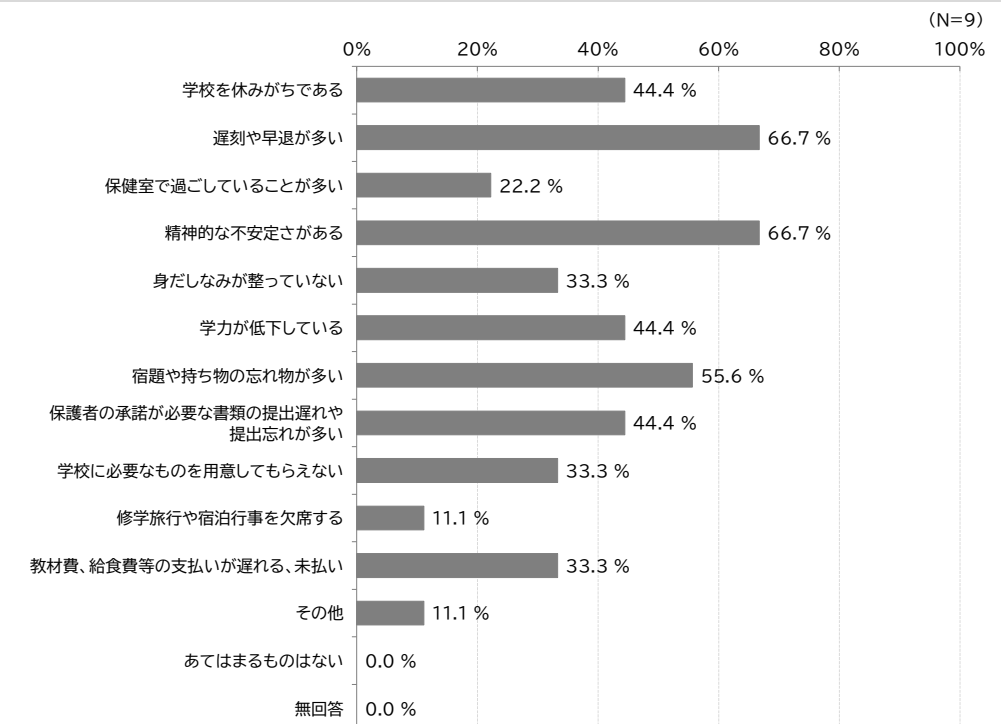
- ・緊急性が低いから。
- ・世話が必要な家族の体調や精神状態によって変わることがありそうだから。

(4) ヤングケアラーと思われる児童・生徒の学校生活の状況

ヤングケアラーと思われる児童・生徒の学校生活の状況について (問 15(1))

※ヤングケアラーと思われる児童・生徒がいると回答した学校のみ

- 「遅刻や早退が多い」及び「精神的な不安定さがある」が66.7%で最も高い割合である。
- 次いで「宿題や持ち物の忘れ物が多い」が55.6%となっている。



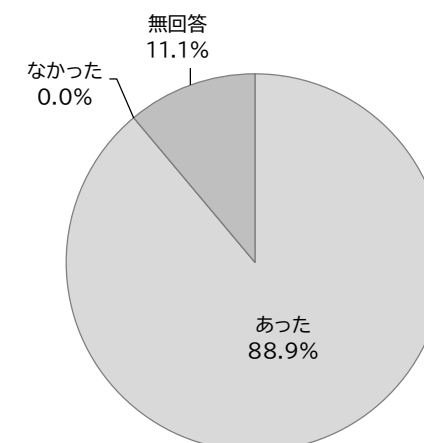
(5) 支援を行うにあたり困難であると感じた点

支援を行うに当たり、困難であると感じた点はあるか 問 15(4) ※ヤングケアラーと思われる児童・生徒がいると回答した学校のみ

把握や支援にあたって難しいと感じること(問 15(6)) ※ヤングケアラーと思われる児童・生徒がいると回答した学校のみ

- 支援を行うに当たり困難であると感じた点は、「あった」が88.9%を占めている。
- ヤングケアラーの把握や支援にあたり困難であると感じていることとして、家族内のことで問題が表面化しにくく、子どもの状況把握や家庭への介入が難しいことなどが挙げられる。

(N=9)



問 15(6) ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいと感じること(一部抜粋)

- ・本人の学校生活に顕著に影響が表れていない場合、把握しづらい。
- ・教職員の認識をはじめ、この学校の体制及び港区の支援体制について共有されていない。
- ・兄弟が多く、お手伝いの範ちゅうなのか、ヤングケアラーなのか判断が難しい。
- ・家庭の様子がつかめない。
- ・学校が必要以上に家庭に入れないこと。家庭訪問も、保護者が拒否した場合はできない。